

骨粗しょう症の治療薬BP

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 30 》

骨粗しょう症の治療薬として広く使われているビスホスホネート(BP)製剤。骨折予防に効果を発揮する一方で、長期間使用するとあごの骨の骨細胞が死んで感染を生じ、骨が腐った状態の顎骨壊死を起こすことが近年、分かってきた。一度発症すると完治するのが難しく、BP製剤を使用中は歯科治療の制約も受けることから、県立中央病院は注意を呼び掛けている。



三沢 常美
口腔外科科長

長期使用で顎骨壊死のリスク

転移の抑制には注射薬が使われる。県立中央病院では2011年に、外来の延べ患者数の約2・6%、1日平均の入院患者数の約0・6%に使用している。

口腔外科科長の三沢常美医師によると、あごの骨は骨を作りかえるリモデリングの回転率が高く、かむ圧力もかかるため、骨の代謝異常を引き起こすBP製剤の影響を受けやすい。典型的な症状は、歯ぐき部分の骨の露出。さらに細菌感染による歯肉の腫れや痛み、

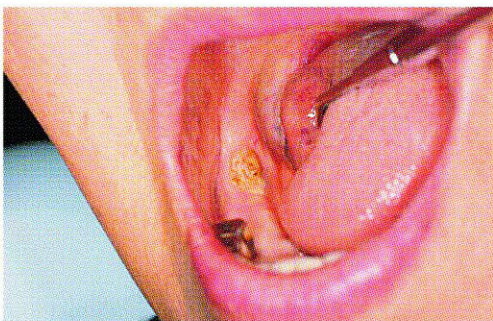
歯のぐらつき、あごのしびれが生じ、悪化すると骨折を起こすこともある。

BP製剤を3年以上使用している人は顎骨壊死の可能性が高くなるため、歯科治療を行う際はBP製剤を前後3カ月ほど中止することが重要だ。糖尿病や喫煙、飲酒、口内の不衛生も顎骨壊死のリスクを高めるといふ。

一方、治療法は感染に対する抗菌薬の投与と、腐ってしまった骨の除去に限られている。

三沢医師は「BP製剤は病気の治療に欠かせない場合もあるが、長期使用には注意が必要。薬の効果と副作用のバランスを考慮して」と話す。BP製剤を使用している人で「抜歯後の痛みが治まらない」「歯ぐきに硬いものが出てきた」「あごが腫れてきた」などの症状がある場合は、早めの受診を勧めている。

BP製剤による顎骨壊死。歯ぐき部分の骨がむき出しになっている



Ⅱ第2、4木曜日に掲載します